様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　５月３１日現在

機関番号：２３８０３
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2008～2011
課題番号：２０７２０２０１
研究課題名（和文）　ビザンツ帝国の教会・修道院改革についての体系的研究

研究課題名（英文）　A Systematic Study on the Church and Monastic Reform in Byzantium

研究代表者
橋川　裕之（HASHIKAWA HIROYUKI）
静岡県立大学・国際関係学部・講師
研究者番号：90468877

研究成果の概要（和文）：本研究は、東ローマ／ビザンツ帝国において展開した教会と修道院を対象とする改革運動を体系的に考察し、その特質を包括的に把握することを意図したものである。同時代の記述史料の分析と修道院遺跡の地誌的調査を同時に進めた結果、改革の多くの局面で、生活規律の強化ないし古代的伝統への回帰を追求する修道士集団が主導的な役割を果たしており、彼らの政治的理想が改革の範囲と方向を規定していたことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study was intended for a systematic analysis and precise comprehension of the reform movement that progressed in the Byzantine church and monasteries from the eleventh to fourteenth centuries. Based on a variety of evidence provided by contemporary written materials and topographical information, it was established that monastic groups who pursued a strengthening of disciplines within their communities or a return to the tradition of ancient monastic fathers played a leading role in many phases, determining the extent and course of the reform with their own political ideals.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	800,000	240,000	1,040,000
２００９年度	700,000	210,000	910,000
２０１０年度	800,000	240,000	1,040,000
２０１１年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学、西洋史
キーワード：ビザンツ帝国、ギリシャ正教、教会改革

１．研究開始当初の背景
中世における教会と修道院の改革運動は今日ではメジャーな研究テーマであるが、大半の歴史学者が解明に専心しているのは、西ヨーロッパのカトリック世界におけるそれである。たとえば、ローマ教皇グレゴリウス７世によって、カトリック教会の世俗権威からの解放が目指された、いわゆるグレゴリウス改革については、世界的にはＧ・テレンバッハらの、またわが国では野口洋二氏の一連の業績によって広く認められている。さらに、前世紀半ば頃から、西欧中世の教会改革には修道院の改革も重要な要素として含まれていたことが、Ｇ・コンスタブルらによって指摘され、学界の共通認識となっている。
このように、西欧世界で生じた改革運動に

ついてはすでに十分な研究蓄積があるのに対し、ビザンツ帝国の改革運動を扱った研究は比較的乏しく、体系的な研究は皆無である。しかし近年、私有の教会・修道院の法的地位の変遷を追ったＪ・Ｐ・トーマスの研究など、重要な成果が現れつつある。

研究代表者はビザンツ帝国末期の宗教論争を研究する過程で、ビザンツ教会の内部から自己刷新の運動が断続的に生じており、それが帝国を取り巻く政治・文化的な状況と密に連動していたこと、そしてこの改革運動が、アタナシオスという名の修道士がコンスタンティノープル総主教であった時代（在位1289-93 年、1303-09 年）に、もっともラディカルな局面を迎えていたことを発見した。関連するギリシャ語史料を注意深く読解した結果、アタナシオスの試みは、教会における教養エリート的聖職者の影響力を極力排除し、厳格主義的な修道士による教会と信者の指導を確立するラディカルな改革であり、とくに教会改革の領域に関しては、西欧のグレゴリウス改革と同様、「教会の自由」という観念が枢要な役割を果たしていたことを明らかにした。

アタナシオスの改革が西欧のグレゴリウス改革と共通する観念を有していたのはなぜなのか。これに答えるためには、東西のキリスト教世界の影響関係を考察することが不可欠である。このほか、アタナシオスの改革は一般信者や修道士の日常生活をも対象としており、11 世紀以降に進展した私有教会施設に対する改革運動やボゴミール派異端の抑圧政策と関係していることが推測できるが、これらの具体的な関係はいまだ実証されていない。またアタナシオスの試みが後代のビザンツ教会の制度および全体的方針にどのような影響を与えたのかも未解明である。

２．研究の目的

本研究は、ビザンツ帝国の教会・修道院改革についての体系的分析および把握を目指すものである。中世に行われた教会と修道院の改革といえば、いわゆるグレゴリウス改革を嚆矢とする西ヨーロッパ世界のそれがつとに有名であるが、ほぼ同じ時期に、ビザンツ帝国においても教会と修道院の改革が進展していた。わが国はもとより、欧米のビザンツ学界においても取り上げられることの少なかったこの改革について、まずはその歴史的展開の過程を跡づけることでそれが連続的性格を有する運動であったことを示し、次いでビザンツ帝国の政治および文化的な状況との関係を多面的に分析することによって、その歴史的特質を解き明かすことが本研究の目的である。

この目的を達するために、改革運動を初期、中期、後期と三つの時期に区分し、それぞれの時期ごとに、いかなる問題の改革が追求され、それがいかなる状況下で実行されたのかの検討を試みる。ビザンツにおける宗教的な改革が顕著な特徴をもって観察されるのは、西方でグレゴリウス改革が開始されたのとほぼ同時期、11 世紀後半以降である。ビザンツ教会そのものはオスマン朝支配下においても存続したが、研究の年限と内容のまとまりを考慮して、ビザンツ時代のみを対象とする。

（１）初期、11 世紀後半から 12 世紀末まで：ビザンツ帝国においては修道院の制度的改革が最初に追求された。これには主に二つの側面があり、一つは、教会ないし修道院を一定期間、俗人に貸与する慣行（ハリスティキ）に対する規制、もう一つは、詳細な規則（ティピコン）の設定による共住修道院の再編である。これら二つの運動はともに 11 世紀後半に始まっているが、それはなぜなのか。それらは、いかなる集団によって主導され、当時のビザンツの修道院を取り巻く状況のみならず、帝国全体の情勢といかに対応し、そしていかなる結果を招来したのか。これらの問題について、コンスタンティノープルおよびアンティオキアの教会関係者の動向と皇帝の教会政策を中心的に考察する。

（２）中期、13 世紀初から 14 世紀初まで：中期は、第 4 回十字軍遠征から総主教アタナシオスの在位した時代まで、すなわち帝国が様々な政治変動にさらされる中、改革の重点が修道院から教会の制度に移行した時期である。この段階では、改革の重点がなぜ修道院から教会へ移行したのか、そして、アタナシオスの改革を可能にした条件は何か、という問いが重要になる。改革の支持・推進集団の構成が変化したプロセスを跡づけ、それが改革運動に及ぼした影響を一次史料に即して突き止めることを試みる。

（３）後期、14 世紀半ばから 1453 年まで：後期はアタナシオスの退位後から帝国の滅亡までとし、アタナシオスの登場によってもっともラディカルな局面を迎えた改革運動が、その後、どのように展開したのかを考察する。この段階で注目されるのは、ヘシカズムと呼ばれる正教独自の神秘主義的霊性の流行である。その生活において、神との神秘的合一を図ることを目指した一部修道士らは 14 世紀半ば以降、ビザンツ教会を指導する存在になった。新たな霊性の担い手である彼らはいかにして台頭し、教会組織と信者への司牧をいかなる方法で維持したのかを、主に教会会議の決議文書と神学的論争文献の読解を通じて考察する。

３．研究の方法

本研究は、文献資料の分析と実地調査とを組み合わせて実施する。文献資料に関しては、代表者がすでに所有している資料のほか、代表者の所属機関の図書館に所蔵されている資料を主に用いる。実地調査については、トルコ共和国のイスタンブール、小アジア西部の山岳、カッパドキアの諸修道院を対象とし、ビザンツ時代の記述資料を参照しつつ地誌調査を行う。

（１）11 世紀の教会と修道院の改革運動はともにコンスタンティノープルとアンティオキアの二都市を中心に推進されていたが、これらの運動の要因とプロセスを明らかにするために、運動に関与した聖職者・修道士の残したテクストおよび皇帝の教会政策に関連するテクストを分析する。また、テクスト分析にもとづく理解を補強するために、イスタンブールおよびアンティオキア（現アンタクヤ）で調査を実施する。

（２）13 世紀に帝国が経験した政治変動と、アタナシオスが総主教位を退くまでのビザンツ教会の改革運動との関係を正確に把握するため、1204 年以降のニケーア期からアタナシオスの時代までの総主教の発行文書・書簡等のテクストを網羅的に分析する。他方で、改革運動を、その担い手となった修道士の生活環境の点からも理解すべく、13 世紀に改革者を多く輩出した小アジア西部の山岳修道院跡（ガリシオン山）で実地調査を行う。

（３）ビザンツ末期の改革運動を修道霊性と教会組織の二つの側面から考察する課題についても、記述資料の分析が中心的な活動になる。神秘主義霊性ヘシカズムは 13 世紀頃からビザンツの複数の山岳修道院を中心に広まり始めていたが、14 世紀になると、それまで繁栄していた小アジア西部の山岳修道院がのきなみ放棄されたこともあって、ギリシャ北西部に位置するアトス山が中心地的な性格を帯びるにいたった。新たな霊性を奉じ個々の内面的改革を志向した修道士らがビザンツの教会と信者を指導する地位に就いたとき、ビザンツ教会の組織と司牧にはいかなる変化が生じたのか。帝国最後の時期に、前段階の改革の遺産はどのように継承されていたのか。これらの問題に対する解答を、ビザンツ末期に由来する豊富な一次資料の中に探る。

４．研究成果

（１）主な成果

①初期：　本研究で、ビザンツの教会・修道院を対象とする改革運動の開始された時期と位置づけた 11・12 世紀については、黒山のニコンと称される修道士とプラトン主義哲学者ミハイル・プセロスの思想、活動、テクストに焦点を当てて考察を行った。黒山のニコンは 11 世紀後半にアンティオキア周辺で活動した修道士であり、修道生活に関係する法規や教父の文言を集成した『パンデクテ』と、自身が作成した修道院規則や書簡を含む『タクティコン』等のテクストを残した。彼はその生前の活動よりもむしろ残した著述によって後代に影響を与えた修道士であり、代表者は、彼のテクストの流布のルートおよび翻訳の経緯を突き止めることで、その修道生活への影響の範囲を明確にするよう試みた。明らかにしえたのは、ビザンツにおいては、ニコンの『パンデクテ』のみが注目を集め、修道生活を送る上での有益なハンドブック的書物として、アトス山の修道院を中心に写本が出回っていたこと、他方で、正教スラヴ世界においては、『パンデクテ』のみならず『タクティコン』も広く伝播していたことであり、可能性として示唆したのは、これら二つのテクストがビザンツにおけるスラヴ人修道士の生活拠点であった、アトスのヒランダル修道院とコンスタンティノープルのストゥディオス修道院において、ギリシャ語に堪能なスラヴ人修道士（ブルガリア人か）の手でスラヴ語に翻訳されたということである。プセロスについては、彼が晩年にかけて書きつづった歴史書のなかで、教会の問題と修道士勢力の政治へのかかわりをどのように記述しているかを分析した。結果、彼が「政教分離」ともいうべき状態を理想としていたこと、そして彼のとりわけ無教養な修道士勢力への批判的認識が高位の世俗官吏や聖職者のポストを求めるエリート的知識人に影響を与え、彼らの重視する世俗的教養と、神秘主義的な傾向を強める修道霊性との緊張関係をもたらしていたことを確認した。

②中期：　13 世紀から 14 世紀にかけてビザンツ教会で進展した改革の特徴を把握するため、その主要な担い手であるコンスタンティノープル総主教アタナシオスの事績と、13 世紀後半までに、アタナシオスを含む厳格主義的な修道士層に広く共有されるにいたった政治思想を集中的に検討した。アタナシオスについては、彼自身が 1310 年代半ばに、写字生の一人として自身の書簡集写本（ヴァティカン写本；Codex Vaticanus Graecus 2219）の制作に関与したこと、そして、彼が 1297 年より自身の手元に残し始めたオリジナル書簡の写しがヴァティカン写本の主要史料になっていたことを明らかにした。また、アタナシオスの周辺で発生したとされる奇跡をとりあげ、1289 年における彼の最初の総主教就任と、14 世紀半ばの公的な聖人認定に、その奇跡伝承が大きな役割を果たしていたことを指摘した。他方で修道士らの政治思想

の問題については、13 世紀後半に一部の修道士や教会人が、ラテン人（＝カトリックの西欧人）を異端者であると公言し始めたことに注目し、政治的には皇帝による過酷な処分を招きかねない彼らの言動は 1273 年の高位聖職者ヨアニス・ベッコスの発言を端緒としたこと、またそれは 1054 年のいわゆる東西教会のシスマ以前の、両教会の教義・慣習上の相違に由来していたことを示した。

③後期：　本研究においてビザンツの教会・修道院の後期局面と位置づけた 14 世紀については、1340 年代後半以降、ビザンツ教会の指導者的地位についた修道士集団が総主教アタナシオスの記憶をどのように活用したのかを考察した。アタナシオスは総主教位を 1309 年に退き、1310 年代後半に死去したと推測されるが、政治的立場を異にする人物が後任総主教となったこともあり、彼へのポジティブな評価はしばらく定着しなかった。状況が大きく変化したのは彼の遺骨の移転に際してであり、首都のアタナシオス修道院の修道士たちは掘り出した彼の遺体が腐敗を免れていたと主張し、ストゥディオスのテオクティストスなる修道士に伝記等の記念的テクストの執筆を依頼した。その後、アタナシオスが聖人であるとの評判が首都を中心に広まり、1360 年代に開催された教会会議において、彼の聖人位が正式に認定された。本研究では、アタナシオスが神秘主義霊性ヘシカズムを実践する修道士、すなわちヘシカストであったのか否かという問題と、14 世紀半ばにビザンツ教会の中心勢力となった修道士集団とアタナシオスの実際の関係がいかなるものであったかという問題に対し、解答を与えることを試みた。テオクティストスの伝記とそれを改作・拡充する形で書かれたイグナティオス・カロテトスの伝記、そして、ヘシカストと呼ばれる修道士集団のネットワークを考察の手がかりとして、以下のことを示した。すなわち、アタナシオスは神秘主義的な傾向を持たず、後のヘシカストとは明確に異なるタイプの修道士であったこと、したがって、後のヘシカストらがアタナシオスに注目したのは、神秘主義的側面での近親性ではなく、彼の聖人としての評判と教会改革者としての模範によるものであったこと、彼らはビザンツ教会の結束を再強化する目的で、自らの支配をアタナシオスの改革に接続しようと欲したことである。

（２）実地調査

本研究では、修道士による教会改革への関与を彼らの出自や生活環境の面からも理解するため、トルコ共和国での地誌調査を継続的に行った。2008 年度にはイスタンブール、ブルサ（プルサ）、エルデッキ（キジコス）、2009 年度にはエディルネ（アドリアノープル）、エフェス（エフェソス）、2010 年度にはアンカラ（アンキュラ）、コンヤ（イコニオン）、アンタクヤ（アンティオキア）、2011 年度にはカッパドキア、カイセリ（ケサリア）を訪問し、修道院遺跡と一般集落遺跡との位置関係、修道院遺跡の建築および壁画の保存状態等を調査し、写真を含む研究データを集積した。エフェスでは、11 世紀から 13 世紀末にかけて栄えた聖ラトロス修道院の遺跡の特定を試みたが、発見にはいたらなかった。当時の、とりわけ僻地で暮らした修道士の生活環境を理解するという点では、大小規模の多数の修道院遺跡が現存するカッパドキア地域での調査がきわめて有益であった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

① 橋川裕之、アーカイヴとしてのコーラー―総主教アタナシオス書簡集（Codex Vaticanus Graecus 2219）の場を求めて、『早稲田大学高等研究所紀要』3 号、査読有、2011 年、35-56 頁
② 橋川裕之、声を救う――アタナシオス書簡集の起源について、『早稲田大学高等研究所紀要』創刊号、査読有、2009 年 5-41 頁
③ 橋川裕之、アルセニオス派のシスマ終結の背景について、『プロジェクト研究』（早稲田大学総合研究機構）4 号、査読有、2009 年、69-83 頁
④ 橋川裕之、総主教アタナシオスとヴァティカン写本の筆跡――マノリス・パテダキスの新説を吟味する、『オリエント』51 巻 2 号、査読有、2009 年、116-139 頁
⑤ 橋川裕之、魂を脅かす平和――ビザンツの正教信仰とリヨン教会合同、『洛北史学』10 号、査読有、2008 年、1-28 頁
⑥ 橋川裕之、コンスタンティノープルの奇跡――総主教アタナシオスに注目して、『アジア遊学』115 号、査読無、2008 年、66-75 頁

〔学会発表〕（計６件）

① 橋川裕之、14 世紀ビザンツにおける理性と宗教問題――キドニスの試み、日本宗教学会第 70 回学術大会、関西学院大学、2011 年 9 月 4 日
② 橋川裕之、ビザンティン帝国における哲学と制度、ＵＳフォーラム 2011、静岡県立大学、2011 年 9 月 27 日
③ 橋川裕之、コンスタンティノープルのストゥディオス修道院とスラヴ人修道士、

ＵＳフォーラム、静岡県立大学、2010 年８月３日
④ 橋川裕之、パラマスとバルラームの対話——14 世紀ビザンツの平和思想、日本宗教学会第 69 回学術大会、東洋大学、2010 年９月４日
⑤ 橋川裕之、ラテン人への憎悪を超える——ベッコスの転向について、日本宗教学会第 68 回学術大会、京都大学、2009 年９月 13 日
⑥ 橋川裕之、シリアからロシアへ——黒山のニコンの著述の航跡、北海道大学スラブ研究センター・シンポジウム「北西ユーラシア歴史空間の再構築——ロシア外部の史料を通じてみた前近代ロシア世界」、北海道大学、2009 年 11 月１日

〔図書〕（計４件）
① （分担執筆）橋川裕之、アトス山の静寂——総主教アタナシオスとビザンティン・ヘシカズムの接点、藤巻和宏編『聖地と聖人の東西——起源はいかに語られるか』（勉誠出版）、査読有、2011 年、203-234 頁
② （分担執筆）橋川裕之、学びの果て——ビザンティン哲学者の自伝と自負、森原隆編『ヨーロッパ・エリート支配と政治文化』（成文堂）、査読有、2010 年 297-321 頁
③ （分担執筆）橋川裕之、シリアからロシアへ——黒山のニコンの著述の航跡、小澤実編『北海道大学スラブ研究センター共同利用・共同研究拠点公募プログラム・シンポジウム「北西ユーラシア歴史空間の再構築：ロシア外部の史料を通じてみた前近代ロシア世界」報告書』、2010 年、査読無、265-286 頁
④ （分担執筆）橋川裕之、ビザンツ帝国を救うべき新法——総主教アタナシオスのネアラについて、鈴木秀光・高谷知佳・林真理子・屋敷二郎編『法の流通——法制史学会 60 周年記念若手論文集』（慈学社出版）、査読有、2009 年、467-499 頁

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
上の〔学会発表〕に該当しない招待講演
① 橋川裕之、ビザンツにおける哲学と制度——ミハイル・プセロスの以前と以後、上智大学中世思想研究所講演会、上智大学、2012 年３月 23 日
② 橋川裕之、ビザンツ世界における旅とその記述、慶應義塾大学言語文化研究所公募研究 2010・2011 年度「前近代の地中海世界における旅をめぐる知的営為と記述」、慶應義塾大学、2011 年２月５日
③ 橋川裕之、プラトンと歴史——『パイドロス』のもう一つのテーマ、早稲田大学高等研究所第 38 回月例研究会、早稲田大学、2011 年９月９日

６．研究組織
(1)研究代表者
橋川　裕之（HASHIKAWA HIROYUKI）
静岡県立大学・国際関係学部・講師
研究者番号：90468877

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし